

No.159

2009.  
3.31

# 岐阜の博物館

編集兼発行

〒501-3941 関市小屋名  
(岐阜県百年公園内)

岐阜県博物館内  
岐阜県博物館協会  
TEL 0575-28-3111

## 作者と収集家の思いを伝える

ミュージアム中仙道 美濃歌舞伎博物館・相生座 館長 小栗 幸江



現在、私が仕事場にしている2つの施設は、一人の収集家の熱い思いの結晶の場所である。その収集家とは紛れもなく私の父である。日本の文化をこよなく愛し、さまざまなものを収集し整理し研究もしていた父

は、日本の文化の持つ魅力を次の世代に伝えたいという思いに溢れていた。美濃歌舞伎博物館・相生座は、失われそうになっていた郷土芸能の保存継承のため、ミュージアム中仙道は先人の残した芸術を公開するために開館した。

そんな血が私の中にも流れている。私の収集のスタートは1枚の記念切手であった。たしか、横浜開港100年を記念したものだったと思う。記念切手が発行された当時、私はペリーが来航した浦賀にほど近い、東京湾に面した小さな町に住んでいた。近くには日本で初めての洋式灯台として明治2年に建設された観音崎灯台もある。小学生だった私は、日本の文化の分岐点にかかわるその切手がどうしてもほしかった。発売日に学校をサボって近くの郵便局へ切手を買に行った。(もちろん両親には内緒)その当時は私の町では、記念切手は並ばなければ手に入らないものだったからだ。小学生の私が並んでいるのを見た郵便局員が、不審に思っ学校へ連絡した。私は校長室へ呼ばれひどく叱られた。「授業より切手が大事なのか」といわれ「そうです。どうしてもこの切手がほしかった」と答えた私は、以来50年ずっと切手の収集を続けることになったのである。(ちなみに今年は横浜開港150周年に当たる)小・中学生の頃はいろいろなものを集めてみた。「板ガムの中包みの帯」「マッチの軸」「小さなガラス瓶」「毛糸などの糸見本」「海岸に打ち上げられるガラスの破片」など、たわいの無いものばかりではあるが、中でも和菓子や食品の「かけ紙(かけ紙の



文化は日本だけ)」は切手同様、現在も続いている。

古くヨーロッパの美術館のルーツは戦利品の展示だったという。収集したものを人に見せたいのは人の常だが、そうした収集家がいからこそ、すばらしい作品が世に残ったともいえる。現在でも、収集家が熱い思いで収集したものを、まとめて美術館や博物館に寄贈したり寄託することがある。そして私たちはそれを楽しむことができるとともに、その収集家の思いや、作家の思いに出会うことができる。

昨年はダーウィン生誕200年を記念して関連のイベントが沢山開催されたときいた。

かのダーウィンも大変な収集家だったようだ。その収集の中から、ひとつの理論をみつけ出したともいえる。集めることで何かが見えてくるのだ。美術館における学芸の仕事は、収集・保存・研究・展示等々あるが、研究員として論文を出したりすることがすばらしいというような風潮があることは否めない。しかし、それでよいのであろうか。特に最近、美術館・博物館事情は大きく変化しようとしている。特に公立の施設の場合、指定管理者制度への移行や公益法人格の取得など、事務面・運営面での変革を迫られている。また美術品についても「登録美術品制度」が施行され、さまざまな論議をかもしている。博物館・美術館の利用者をそっちのけにして、国や財政の都合で改革が進められている中、これからの施設はどうなるのだろう、学芸員の果たす役割はなんなのだろうと考えてしまう。美術館・博物館の魅力の要素はさまざまあると思うが、そこに働く人が人をひきつけるのではないだろうか。展示品や所蔵品や企画について熱く語れる職員がどれほどいるのかということだと思うのである。学芸のはしくれにいる私は、研究員としてではなく、一人の収集家として資料の整理・保存・活用につとめ、収集家の思い、作家の思いを伝える役目を果たしてゆこうと思っている。「美術館・博物館は人々の思いが合流し合うところ」「文化は人から人へと受け継がれてゆくものだ」というということ、そして私自身の熱い思いも伝えながら……。

## 第33回東海三県博物館協会研究交流会報告

日 時：平成20年10月22日(水)・23日(木)  
会 場：愛知芸術文化センター アートスペースA  
主 催：愛知県博物館協会  
参加者：90名(岐阜県から22名)

第33回東海三県博物館協会研究交流会は、愛知県の美術館、芸術劇場、文化情報センターなどの総合施設である愛知県芸術文化センターで行われました。開催に先立ち、愛知県博物館協会会長 岡田 大氏よりあいさつがありました。

今年の本交流会のテーマは「来館者の心をつかむ～自然系博物館に学ぶ～」です。まず、愛知県の自然系博物館3園館からの事例発表がありました。豊橋市自然史博物館 副館長 松岡敬二氏より「展示改装する力がうむ魅力的な展示」というテーマで、同館が行った大掛かりな改装と展示面積拡大についての発表がありました。展示スペースを、子どもを対象としたものと、大人を対象にしたものの二つにわけた二段展示などの手法を用い、その結果、入館者数の増加につながったということでした。次に名古屋市東山動物園獣医師

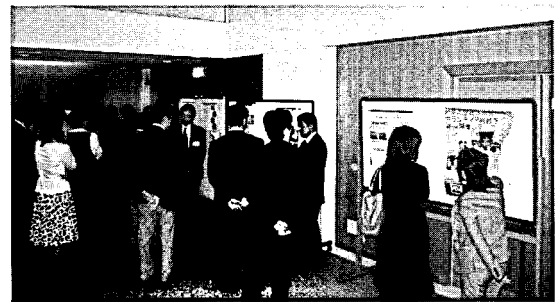
中村彰氏からは「動物たちのメッセージを伝える～当園の実践から～」について、動物のエンリッチメントに考慮した展示方法や、見るものと見られるものの垣根を最小限におさえる展示法など、獣医師ならではのお話を聞かせていただくことができました。日本モンキーセンター 高野智学芸員からは日本モンキーセンターが行っている学習プログラムや学校と連携して行っている活動などについての発表がありました。

続いて、三重県からは代表して志摩マリナランド館長 大久保修三氏より、同水族館の現状をお話いただきました。同水族館では、地元の旅館と連携し、「夜の水族館」を公開しており、年々その需要は増加傾向にあるそうです。



最後に岐阜県から、岐阜県世界淡水魚園水族館 アクア・トぎふが、夏に行ったイベント「カエルフェスタ 2008」について、発表させていただきました。2008年の国際カエル年に関連付け、カエルに関する参加型のイベント(カードゲーム、カエル体操など)を開催。「ただ見るのではなく体験する」。それにより来館者とスタッフとの間で生まれるコミュニケーションの大切さをお話いたしました。

以上の事例発表終了後、各園館によるパネルディスカッションが行われました。



研究会の最後は、次回の開催県である岐阜県を代表し若宮修古館 館長 若宮多門氏よりご挨拶がありました。



この後、交流会が実施され、翌23日は、例年とは異なり、各自での愛知県博物館協会加盟園館の視察となりました。

(機関紙委員 岐阜県世界淡水魚園水族館 堀江真子)

## 第56回全国博物館大会に参加して

日 時：平成20年11月20日(木)～21日(金)

場 所：松江市 島根県民会館

参加者：約400名

全国の博物館や美術館関係者が集まる「第56回全国博物館大会」がメインテーマを「地域に生きる魅力ある博物館への新たな出発」として島根県松江市で開催されました。



大会には、全国各地から約400名の参加者があり、本県からは5名が参加しました。

開会式では日本博物館協会の会長である竹内誠江戸東京博物館館長の挨拶にはじまり、文部科学省大臣官房審議官、島根県副知事、松江市長からの祝辞が続きました。

また、平成20年度は、昭和3年に「博物館事業促進会」として創設された「日本博物館協会」の創立80周年の記念すべき年にあたります。80周年記念表彰では、38名の方々が表彰されました。平成20年度顕彰は55名が受賞されました。また棚橋賞として大原美術館学芸課長の柳沢秀行氏が表彰されました。

続いて行政報告として、文部科学省の栗原祐司生涯学習政策局社会教育課企画官と文化庁の関根新市文化財部美術学芸課美術館・歴史博物館室長から、文部科学省・文化庁における博物館振興施策の概要、芸術拠点形成事業、美術館・歴史博物館における学芸員等の研修等について、平成21年度予算要求などについての説明がありました。

記念講演は「地域住民との連携－歴史に学び未来に生かす」と題して国立歴史民俗博物館長・山梨県立博物館長平川南氏が講演をされました。博物館は、学術資料・情報の収集、整理、保存、

調査研究して提供という一連の機能を有することを最大の特色とした最先端研究機関であること、その地域の自然や歴史や文化の情報発信こそが博物館の使命であるというお話でした。

### <シンポジウム>

「地域に生きる魅力ある博物館」をテーマに布谷知夫滋賀県立琵琶湖博物館上席総括学芸員の司会のもと、講師 松本岩雄島根県立古代出雲歴史博物館学芸部長、神英雄浜田市立石正美術館主任学芸員、樋口尚樹萩博物館副館長より各館の取り組みが発表され、「地域に根ざした調査研究」「博物館と地域の関わり」「よりよいボランティアの活動」等について幅広く活発な議論がされました。

二日目は、「指定管理者制度」と「新公益法人制度への移行と博物館」の二つのテーマに分かれてパネルディスカッションが行われ、「指定管理者制度」に参加しました。

佐久間豊千葉県立中央博物館長の司会で、矢内高太郎島根県立古代出雲歴史博物館長の「管理(広報も含む)部門のみを管理代行している事例」、許斐修輔佐賀県立宇宙科学館長の「全面的に管理代行している事例」、高井健司大阪市ゆとりとみどり振興局文化部博物館群運営担当課長代理の「地方独立行政法人による管理運営を検討している事例」の報告や説明がありました。会場からも活発な質問や意見が出されました。

閉会にあたり、博物館が生涯学習機関として、地域住民や利用者との連携を密にし、地域の特性を活かした博物館づくりを進め、生涯学習社会やまちづくりの中核施設として、その使命を果たし、存在理由を社会公共に明らかにすることを目指す大会決議が採択されました。

なお、平成21年度の「第57回全国博物館大会」は、北海道旭川市の旭川市大雪クリスタルホールで10月1日(木)、2日(金)の両日に開催される予定です。

(機関紙委員 岐阜県博物館 和田久司)

## 第117回岐阜県博物館協会公開講座報告 文化講演会

### 演題：「北斎か、やっぱり広重か」

期 日：平成20年10月11日(土)  
会 場：中山道広重美術館 講座室  
講 師：名古屋市美術館副館長 神谷 浩氏  
参加者：約50名



広重没後150年を記念して開催した「広重と北斎の東海道」展は、広重と北斎それぞれの東海道絵を比較展示し、風景画二大巨匠の表現の違いと「東海道の絵師」広重自身における表現の変化を楽しんでいただくものです。本展の関連イベントとして公開講演会を開催し、名古屋市美術館副館長であり、浮世絵学会常任理事としてご活躍中の神谷浩氏にご講演いただきました。

神谷浩氏は、ゴッホやモネらが広重・北斎作品を収集し、模写を行なった事例を示され、広重と北斎が西洋の画家達に大きな影響を与えた芸術家であることを紹介されました。両者の違いとして、北斎は高いデッサン力で形と色による「空間の妙」、「造形の世界」を作り出す画家であり、一方の広重は「俳句のように」イメージネーションを掻き立てる芸術性をもち、とりわけ脚色と演出の巧さが際立つ「風景画」を描く画家であると説明されました。「北斎か、やっぱり広重か」、参加者一同、その問いかけにじっくりと向き合う有意義な時間となりました。

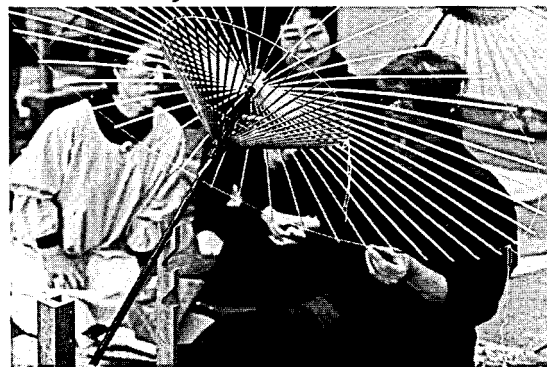
(中山道広重美術館 福田訓子)

## 第118回岐阜県博物館協会公開講座報告 「岐阜和傘をつくる」

期日：平成21年1月11日(日)～2月22日(日)  
(全4回)

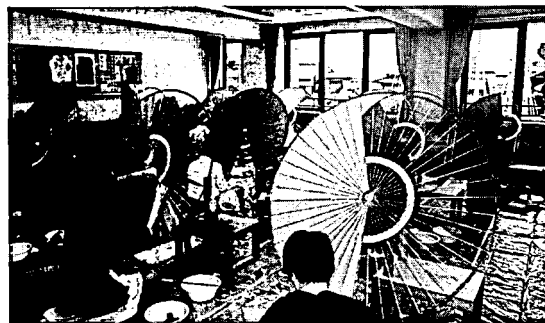
会場：岐阜市歴史博物館  
講師：岐阜市和傘振興会の皆さん

岐阜市歴史博物館では平成3年から毎年、講座「岐阜和傘をつくる」を開催しています。この講座は、岐阜市加納の伝統産業である和傘作りを実際に体験し多くの人に親しんでもらおうと、岐阜市和傘振興会にご協力をいただき実施しています。開催当初から岐阜市内にとどまらず、県外からも多数の応募者があり、毎回抽選になるほどの人気講座となっています。



参加者はほぼマンツーマンに近いかたちで講師の手ほどきを受け、傘の骨を糸でつなぐ作業から紙を張り、仕上げまでおよそ1ヶ月半をかけて製作します。職人でも一人前になるまで何年かかる工程もあり、参加者からは「どの工程も難しい」との感想もありますが、「苦勞しても出来上がった和傘の美しさを見ると、またチャレンジしたくなる」という声も寄せられ、繰り返し応募される方もいます。

岐阜の和傘は他の伝統産業と同様、後継者不足などの問題を抱えています。この講座をきっかけに、多くの方が岐阜和傘の伝統と文化を知り、和傘産業や地域の振興にもつながればと期待しています。



(機関紙委員 岐阜市歴史博物館 三山らさ)

## 活動報告 光記念館「出張美術館について」 平成15年度～平成20年度

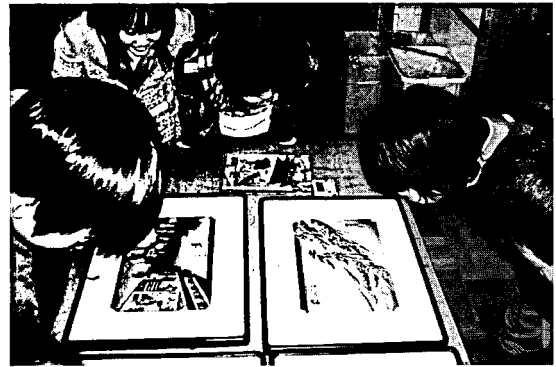
近年、博物館にはこれまでにない新しい分野の活動が求められてきている。特にこれからは、博物館が多様化・高度化する学習を支援するものとして、多方面にわたる要求に対応して行く時代といえる。そのため、博物館に従来の資料収集、保存、展示、調査研究、教育普及活動に加えて、情報サービスを提供したり地域に貢献するという役割が要望されている。



当館と致しまして、これらにお応えする為、平成15年度から平成20年度まで、「出張美術館」を計画・実施致した。その目的は、学校の児童・生徒や社会教育施設に属する方々に、本物の美術作品に触れて頂き、感動・喜びを体験して頂く為である。そして、これらの事業は「文化庁芸術拠点形成事業」に採択され、この6年間行っている。



内容としては、当館は、葛飾北斎の『富嶽三十六景』や歌川広重の『東海道五十三次』『名所江戸百景』など浮世絵、特に風景版画のコレクションが充実しているが、それらは小学校の美術や社会の教科書に出てくる著名な作品であり、それらの本物を地元の小・中学生や施設のお年寄りに解説をしながら間近で御覧頂くというものである。



本物からのみ得られる感動や感激が子供たちの将来に大きく影響してくる。地域の反響としては出張美術館を一度体験してその良さを確信された先生方が、「また来年もお願いします」と言って下さり、地域貢献ということからも継続的に続けてきた。



その結果はアンケートからもわかったことだが、多くの子供たちは北斎や広重を知っているが本物は見たことがない。本物を見るまではそれほど興味がなかったが、出張美術館のあとは大いに興味をかきたてられ、その結果、日本の伝統文化を大切にしたいと心の変化を見せている。今後も作品の保存に十分配慮しながら当館の事業として、継続していきたい。



(機関紙委員 光記念館 吉井隆雄)

## 岐阜県ミュージアムひだ

—地域に根ざした展示・教育普及活動—

〒506-0032 高山市千島町900-1

TEL 0577-37-6161

FAX 0577-35-2252

<http://www.pref.gifu.lg.jp/pref/s27220/>

岐阜県ミュージアムひだは、高山市街地の南西部丘陵に岐阜県が建設した複合文化施設「飛騨・世界生活文化センター」内にある美術博物館である。平成13年に「ミュージアム温故知新」として開館し、平成18年に財団法人岐阜県産業文化振興事業団から岐阜県教育委員会に移管、現在の名称に変更されたが、この度、県の行財政改革の一環で、その活動を縮小するに至った。

これまで当館は、地域文化の発展のために様々な活動を行ってきたが、ここで、平成20年度の企画展示、教育普及活動の事例を報告したいと思う。

### 【企画展示活動】

当館は美術館と博物館の両機能を併え持つ施設である。平成20年度の企画展は次の4展で、うち、「土屋父子展」と「学舎展」は美術作品の展示、他2展は地域の文化に関わる展示であった。

#### ①第33回岐阜県移動美術館

土屋輝雄・禮一父子展 絵ごころの系譜

#### ②山とひだびと 雲上の頂に挑む

#### ③学舎を飾る 受け継がれてきた芸術作品

#### ④花のある暮らし人・飛騨

美術展については年に数回、岐阜県や飛騨にゆかりのある作家の作品展示を中心に開催してきた。一流の作品が遠くへ出掛けなくても鑑賞できた、郷土の作家を再認識できたなどの感想が寄せられている。

文化を紹介する展示では、飛騨山岳会の創立100周年事業とタイアップした「山展」、飛騨の華道文化の歴史を紹介した「花展」で、ともに飛騨山岳会、池坊斐太支部といった地域で活動する団体に協力をいただいた。山展では実際の登山用具の貸与を受けたり、花展では展示室前のロビーに「いけばな」を展示するなど、広報活動を含め、たくさんの会員の方々に積極的な参加をいただいた。

飛騨地域の学校から、所蔵する芸術作品を集

めて展示した学舎展も、飛騨地域3市1村並びに各学校の協力を得て好評であった。

いずれの展示会も、これまで地域の人々が気付かなかった文物に関する再認識、再評価を促し、展示に関わる研究の中で新たな発見もあるなど、文化の掘り起こしに貢献できた。

飛騨地域3市1村の人口は県人口の1割にも満たない16万人ほどであり、各展示会の観覧者数は1日平均40人弱と、決して多くはなかったが、多くのリピーターを生み、地域文化に多少なりともインパクトを与えることができたと確信している。

### 【教育普及活動】

当館では地域文化を尊重し、ふるさとに愛着と誇りの持てる心を育成すると共に、学校・家庭・地域社会と連携した教育文化活動を支援するため、2つの活動を行っている。

#### ○学校支援



当館所蔵の資料をいかし、特に利用の高い小学校4年生の社会科の学習「昔の暮らし」に関わる解説と体験を充実

させた。体験内容としては「昔の洗濯・アイロンがけ体験」「昔のあかり体験」などを実施してきた。また、伝統工芸「春慶塗」の出張講座も行った。

#### ○体験教室

当館の体験教室は、「ものづくり体験教室」「昔の暮らし体験」「美術講座」に類型化することができる。

「ものづくり体験教室」としては廃品等の再利用や身近な材料を活用し、万華鏡、起き上がりコボシ、貝包みストラップなどの制作を実施してきた。

「昔の暮らし体験」としては、しめ縄作り、一位桧細工、紙漉き体験などを実施してきた。



#### 「美術講座」

では講師を招き、水彩画、陶芸、七宝焼きなどの教室を開催した。

参加者は小学生から高齢者まで幅広く、楽しく、真剣に取り組んでいただき好評を得ることができた。

(岐阜県ミュージアムひだ 砂田直彦・藤枝和人)